

《再話》される大沢／《物語化》する「僕」

―村上春樹「沈黙」論―

岡田 康介

一

「沈黙」というテクストは、誰のために語られた物語であるのか⁽¹⁾。この物語内容の中心となつてゐるのは、大沢の中高時代における壮絶な体験談であろう。ただし、その話を伝聞し、「沈黙」という文学テクストとして物語るのは、聞き手である「僕」に他ならない。以下、本稿では「沈黙」の語り手をめぐる分析を展開していくが、その上でテクスト構造に言及した先行研究について、まず見ていく。

たとえば長谷川達哉は「語り手の「僕」が「大沢さん」の語った事件を直接話法的に再現する」「入れ

子構造」を持つと指摘する⁽²⁾。同様に、馬場重行もまた「物語は、「大沢さん」の話を聞き終えた「僕」によつて再話された形」を採ると述べる⁽³⁾。

「沈黙」を論じる際、しばしば指摘されてきたのは、このような「入れ子構造」を持つテクストの性質についてであろう⁽⁴⁾。従来の先行研究では、語り手「僕」の「編集の可能性」、あるいは「再話」という点に関しての確認はなされているが、「僕」の語りテクストにおいて具体的に、どのような作用を及ぼしているかについて、分析した試みは多くない⁽⁵⁾。そのなかで岡田豊は、「沈黙」の語りを詳細に分析し、「僕」に「物語統括主体」と大沢の話を「懷疑的

に受け止め」る「聞き手」という二つの役割があることを指摘した。

岡田は、「聞き手」／「語り手でもある「僕」がどのように聞き」、「大沢の語りがどのようにに相対化されるか、という問いに対し、最後の場面での、〈体験談〉の続きを待っていた「僕」と「ただじつと黙っていた」大沢に、互いの「〈沈黙〉」の落差がある」と指摘する。そして語り手／聞き手の関係性を、「物語ることによる治癒でなく」、「語ることの苦痛と語ることへの意志との間で巻き起こる葛藤を描いた」としてテクストを評価する(6)。

確かに岡田の論考は、テクストにおける「僕」の役割を明確にした点で、首肯できる意見である。ただし、後に見るように岡田の分析では、大沢の発言を解釈する上で、説明できない箇所がある。

本稿では、まず「二」「三」において、これまで前提とされてきた語り手「僕」のテクストにおける位相について再検討する。それを踏まえ、先行研究では回収し切れなかった大沢の綻びとも思われる発言について、分析を加える。

そこで得られた知見は、「四」「五」で課題となる「僕」と大沢の間に生じた、新しい関係性を読み取る際の一つの契機となり得るだろう。これを受け、

結論部では、大沢の語りを「沈黙」というテキストとして〈再話〉する「僕」の意図とはなにか、という問題について探っていききたい。なお、本文の引用は、初出版からおこなった(7)。

二

「沈黙」はこれまで、大沢の語りが「僕」の語り内に包されている、いわゆる「入れ子構造」のテキストとして捉えられてきた。本節ではこの指摘を受けつつ、あらためてテクストを語る主体について再検討することから始めていきたい。それを踏まえ、まずは「沈黙」における大沢の描かれ方について確認する。

「沈黙」は、「僕」の「これまでに喧嘩をして誰かを殴ったことはありませんか」という大沢への問いかけから始まる。なぜ「僕」がこのような「余計な質問」をしてしまったのかは、その後続く言説から、事後的にわかるようなテキストの構造となっている。

「僕」は、大沢の人柄について言及しながら、ボクシングと彼が「どういう地点で結びついたのか」「見当もつか」ず、前述の質問を発する。それに対する応答として大沢の口から語られるのが、彼の中

高時代における体験談である。

その話とは、主として彼の中学二年と高校三年に経験した出来事であり、以後のテキスト内で、大沢の一人称語りによつて、再現される。大沢はテキスト内現在において三十一歳と明示されており、その話は、回想の形で語られるという点をまず確認したい。

ところで、このテキストの舞台となっているのは「空港のレストラン」である。「僕」と大沢は仕事仲間であり、新潟に向う飛行機が遅延したため、そこで復旧を待っている。「体験談」は、この間に大沢が語ったものであり、その話を「僕」が後日書き記したのが「沈黙」というテキストであろう。

ここで重要となるのは、「沈黙」を、「僕」の「再話」という観点から読み解くとするならば、テキストを構成する言説が、おそらくすべて「僕」によつて選び取られている点にある。ここでの「再話」とは、聞き手であり、採集者である「僕」が、大沢から聞いた話を「沈黙」として書き直したことを意味する。したがって「沈黙」に読解上の瑕疵があるとするれば、その直接的な責任は大沢にはなく、「再話者」の「僕」にあることを加えて強調しておきたい。

以上を踏まえ、本稿では、「沈黙」の語り手を「大

沢／僕」と設定する。これは大沢から伝聞した体験談を、リアルな大沢の物語として「再話」している「僕」の存在をより明確にしておくためである。前述の岡田の定義を参照しながら、ここでは「僕」に、「語りの統括主体」という役割を与えておく。

それでは、次いで語り手「僕」の「再話」した可能性を示す論拠について見ていこう。

大沢の話は、彼が経験した時間に沿ったストーリーとして語られる。そこでは時間が不可逆的に語られることはない。この体験談では、中学二年に英語の試験の結果をめぐって青木を殴ったこと、そして高校三年の松本の自殺と、その後、連鎖的に訪れる大沢の危機的状況が、それぞれ中心的な話題となっている。

論に筋道をつけるため、三十一歳の大沢、中学二年、高校三年を「時間A」、「時間B」、「時間C」とした上で、その「時間」を中心に「沈黙」のテキスト構造を【図1】にまとめた。

この図で確認したいのは、起こった出来事の順に語られる大沢の「時間B」／「時間C」のエピソードの間には、次の言説が見受けられることである。

大沢さんはそこで口をつぐんで、目の前のコ―

ヒーカップをしばらくじつと眺めていた。やがて顔を上げてからかすかに微笑を浮かべ、僕の顔を見た。窓の外でジェット機の爆音が聞こえた。ボーイング737が楔のように雲の中に一直線に突っ込んで、そのまま見えなくなった。

大沢さんは話を続けた。(A14)

この言説は、先に確認した〈大沢／「僕」〉の構図を反映せず、「僕」単独の語りとして読み取ることができる。それまで大沢の一人称を取りつつ進められていた回想は、「僕」の直接的な語りの介入を受けることによって、〈時間B〉を離脱して「僕」と大沢が対話する空港の場面に戻されている。

この操作により、中学二年の大沢に焦点化していた眼差しは、ずらされる。そして「僕」が「ボーイング737が」「見えなくな」るのを待った後で、大沢の回想による〈時間C〉の話が開陳されるのである。この迂回的な語り方に、「僕」がテキストに対してせり出してくる様相を確認できるだろう。

併せて浮上するのは、体験談を分けて語った理由である。かりに当時の大沢の姿を区切ることなく、中学から高校までの一貫した出来事として〈再話〉するならば、連続した時間を活写することで、より

切迫感を持たせて、語り得たとは考えられないか。だが、〈時間A〉の乱入によって〈時間B、C〉は、中断を余儀なくされている。

この中断には、大沢から伝聞した話を物語として〈再話〉し、語りを全面的に統括する「僕」の主体性が看取できるのではないか。端的に言えば、「沈黙」とは「僕」の語りによる物語なのだ。

こうして、テキスト内で体験談の中に立ち現れる〈時間B、C〉の大沢は、三十一歳の大沢の回想と「僕」の〈再話〉を経て二重化された、きわめてフィクショナルな存在として定位される。同様に三十一歳の大沢もまた、「僕」が語るテキストの作中人物の一人として考えられよう。時間を三つに分節したことを踏まえ、以下本稿では、〈時間A〉で「僕」と対話する三十一歳の大沢を〈大沢〉、同様に、中学二年の大沢を〈B／大沢〉、高校三年を〈C／大沢〉と定義し、論を進めていきたい。

語り手「僕」の前景化を確認した上で、次節では、松本の自殺を一例として〈C／大沢〉の矛盾した発言を、先行研究との比較を通して取り上げていきたい。

〈C／大沢〉から見た松本は、「目立たないというよりはむしろ印象がな」く、その自殺の知らせを受けたときも、「どんな顔をしていたのかはつきりと思いついた」が、松本を固有名で語ってゐるのは、意味深長であろう。〈C／大沢〉に襲いかかった状況と「松本」があまりに強く結びついているため、〈大沢〉の記憶に残像し続ける、負の側面を暗示していると言つてもよい。

松本は「もう学校に行きたくない」という遺書を残して、高校三年の夏休みの最中に地下鉄に飛び込み自殺をする。新学期が始まり、五日ほどたったある日、〈C／大沢〉は教師に呼び出され、松本の自殺の背景に暴力的ないじめがあつたこと、〈時間B〉での青木とのトラブル、さらには、ボクシングを習っていることについて詰問を受け、その三日後には警察から取り調べを受ける。警察に呼ばれた事実と、松本を殴つていたという噂が重なり合い、〈C／大沢〉は教室内で徹底的な無視にある「地獄のような状況」が到来する。心身ともに追いつめられた〈C／大沢〉の心的状況は、次のように語られている。

あと半年です。あと半年で学校も終わるし、そうすればもう誰とも顔を合せなくてもいいのです。半年間、じつとその沈黙に耐えればいいのです。でも僕には自分が六カ月もつかどうか自信がありませんでした。あと一カ月もつかどうかさえ自信がなかったんです。(421~422)

この箇所と、松本の自殺直後における〈C／大沢〉の発言を比較して分析する都合上、引用を続ける。

僕はそんなこと(論者注・松本の自殺)はたいして気にしませんでした。学校が嫌なら、学校になんて来なければいいのです。それに半年もすれば嫌でも学校を出ていかなくてもならないんです。なのにどうしてわざわざ死ななくてはならないのですか。僕にはよく理解できませんでした。たぶん何かのノイローゼだったんだらうと僕は思いました。明けても暮れても受験の話しか出ないんですから、頭がおかしくなる人間が一人くらい出てきたとしても、不思議はありません。(417)

この二つの言説をめぐる読みは、松本の自殺に対

する語りをどう評価するかという問題と密接に関わっている。それは同時に、「沈黙」の語り手を、どう設定してテキストの読解をおこなうかという前提とも通底する。以下、語り手と二つの引用部分について分析した先行研究について見ていきたい。

一連の〈C／大沢〉の発言を並列して読解した前掲の岡田は、次のような評価を下す。

松本と大沢との共通性に着目して読んでみると、あと半年持つかどうかかわからないような危うい状況にいた人間ならば、松本に対してでも冷淡ではいられないと思われるし、松本と似たような苦しさを体験したという認識があったならば、松本の死についての語られ方がこうも冷淡にはならなかったはずである。この経験を通して、「まわりの人々が受けている傷や苦痛のようなものに対して、人並み以上に敏感になりました」と語っているが、説得力を欠いている。語っている現在において、松本の「傷や苦痛」をも振り返ることができない大沢の冷淡さを逆に浮かび上がらせる一文と捉えることができる。(64)

ここで岡田は、〈C／大沢〉の発言を、現在の「大

沢」の言説と読み換えた上で、松本に対する「冷淡さ」を読み取るが、果してテキストから断定できるであろうか。

確かに、二つの言説の位相差から「松本と大沢との共通性」を見出すことは可能であろう。そしてこの比較から、二人の心的状況が「半年」という言葉を媒介として、相似的に語られているという指摘は注目しておいてよい。

しかしそもそも岡田は「沈黙」の語り手を「僕」に求めていたはずである。ここでの読みは、語り手を「大沢」に設定している点で、読解の前提と矛盾をきたしているとは言えないか。加えて指摘すれば、「僕」を「物語統括主体」として捉えていたことを想起するならば、ここでの「冷淡さ」は「大沢」ではなく、むしろ「僕」に求められるはずである。

同様の誤解は、木村功(8)、前掲の長谷川(9)にも見受けられる。従来の研究では、これまで、自明の事柄として捉えられていた、語り手「僕」に論及しながらの検討がおこなわれていない。ここでの「大沢」の発言に対する評価をめぐっては、テキストの解釈が、大きく揺れていると言えるだろう。

その要因としては、「沈黙」の語り手を「僕」に設定しつつも、「僕」の「編集の可能性」を考慮せず、

ここでの「大沢」に、語り手の役割を求めている事情がある。ここで問われるべきは、テクストの語り手を「大沢／「僕」」に設定することで導かれる、「大沢」／松本への言及であろう。

二つの言説を語り手の問題から回収していくならば、「C／大沢」と松本への発言が、「半年」という言葉を媒介としながら、きわめて親和的に語られていることに注目したい。さらに同様の相似点は、テクストの細部においても見られる。松本が自殺した当初、その主因について、「受験勉強」による「ノイローゼ」だったと予想した「C／大沢」だったが、他方、教室から半ば排除されかけていたときの心理状況を詳細に追いかけてみると、次の記述が視野に入ってくる。

きつとその頃（論者注 危機的状況の最中）僕はひどい顔をしていたんだと思います。よく眠れないし、ノイローゼ気味になっていましたから。（422）

「ノイローゼ」という一語で端的に示されることからわかるように、「C／大沢」の発言と松本への言及は、おそらく意図的な相似性をもって語られているのではないか。一連の言説は、親和的な語り方に

よって、「C／大沢」に逆説的な響きをもたらす。ここでは、松本が置かれた状況を「C／大沢」が追体験することで「まわりの人々が受けている傷や苦痛」に「敏感になる」ことができた、三十一歳に至った「大沢」の成長が読み取れる。

これまで回収し切れなかった「大沢」の結びとも言える矛盾した発言の断片は、「大沢／「僕」」の構図を導入することで、はじめてつながりを見出すことが可能となる。そこには、相似性を巧みに物語る「僕」の存在の一端が窺えるであろう。

次節では、「五」で「大沢」と「僕」の間に生まれた新たな関係性について検討するために、実は無視できない「時間B」における青木との関わりを中心に見ていこう。

四

そもそも青木とは、試験のカンニングの噂をめぐって「B／大沢」が殴った相手である。青木に対して一貫した嫌悪感を抱いていた「B／大沢」は、殴った直後、「こんな奴は殴られて当然」であり、「害虫のような人間」だと評価を下す。

しかし他方、その日の午後を「B／大沢」は、不

穏な心持で過ごしていた。

嫌な気持はずっと僕の中にあつていつまでも去りませんでした。何をして心も休まりませんでした。音楽を聴いても本を読んでも、ちつとも楽しくないのです。胃の底に何かどんよりとしたものが溜まっていて、ちつとも集中できないのです。まるで嫌な臭いのする虫を呑み込んでしまったような気分でした。(413)

〈B／大沢〉は青木を殴ったあとで「嫌な臭いのする虫」を自身の中に「呑み込んでしま」う。この「虫」とは前後の文脈から、青木を指すことが容易に指定できるだろう。〈B／大沢〉においては、青木に対する嫌悪が幾度も口にされるが、前述の傍証としてとりわけ想起しておきたいのが次の箇所である。

僕はその男が体から発散するエゴとプライドの臭いが、もう本能的に我慢できませんでした。それは誰かの体臭が生理的に我慢できないのと同じことでした。(409)

ここでもまた、〈B／大沢〉が取り込んでしまった

「嫌な臭い」と、青木の印象から嗅ぎ取ったとされる「エゴとプライドの臭い」が、加えて「虫」と「害虫」という言葉が、親和的に響き合う。では、〈B／大沢〉はなぜ〈害虫〉を抱え込んでしまうのであるうか。

青木の人間性について〈B／大沢〉では、「誰にもそれを理解することはできませんでした。それがわかってるのはおそらく僕だけでした」と語られているが、一方で「エゴとプライド」を誰よりも鋭敏に感じ取ってしまう〈B／大沢〉の内面にも同種の要素を見出すこともできる。

僕は馬鹿じゃありません。たいした人間ではありませんが、それでも馬鹿じゃありません。我慢するわけではありませんが、僕はその頃から僕自身の世界というものを持つていました。本だって僕くらい沢山読んでいた人間は他にはいなかったと思います。そして僕も若かったし、自分ではうまく隠しているつもりでも、たぶんそういうのを自然に鼻にかけて、他人を見下しているようなところがあったんだと思います。(411)

〈B／大沢〉は、「自身の世界」を確固として保持

する反面、周りの級友を「見下しているようなところ」が「無言の自負心」となり、周囲に対して優越感を抱いていたと思われる。これが〈B／大沢〉がその内面に持ち合わせていた「エゴとプライド」の実相であり、青木と通じ合う本性とも考えられよう。この類縁性こそが、彼が〈害虫〉を取り込む原因となり得たのではないだろうか。

たとえば、青木を殴った結果として〈B／大沢〉は、「自分自身の世界」を形成するための趣味であった「音楽」や読書にしても「心が休ま」らず、彼の基盤は根底から揺さぶられる。噂を鶏呑みにし、相手とおなじ水準に降りてしまったことが、彼の抱え込んでしまった代償と言ってもいいだろう。

現在の〈大沢〉は「青木のような人間に対してそれなりに偉いと思う節もある」、「能力であることは認めます」と評価する。それは自身に潜む〈害虫〉を認め、共生しつつある裏付けとも言える。換言すれば、本来的に内在していた自身の「エゴとプライド」を自覚する〈大沢〉を描いていると言えよう。しかし彼はテキスト内現在でも、トラウマ的出来事の一種の再帰現象として、ある夢を見続ける。そこで〈大沢〉を苦しめるのは、もはや青木ではない。

僕が本当に怖いのはそういう連中です。そして僕が真夜中に夢をみるのもそういう連中の姿なんです。夢の中には沈黙しかないんです。そして夢の中に出てくる人々は顔というものを持たないんです。(426)

この夢の中では「顔を持たない人々」が、彼を脅かし続けている。その人々とは「青木のような人間の話」を無批判に受け入れて、そのまま信じ、「何も理解してないくせに」「他人の意見に踊らされて集団で行動する連中」のことを指す。

〈C／大沢〉を排除しようと働いた教室内の力学を中心となつて駆動したのは、おそらく噂を真に受けた前述のような「連中」たちであろう。しかし、〈大沢〉を苦しめ続けているのは、この「連中」たちに限られるのであろうか。その夢には、「連中」とはまた異質な水準に「顔を持たない人」、「松本」の存在が隠されていると思われる。

「どんな顔をしていたのかはつきり思い出せない」「顔色のあまり良くない男」である松本もまた、〈大沢〉の意識に顕在化しない部分で、夢に再帰してくる「顔を持たない」一人なのかもしれない。「三」で論じたように、「僕」の語り方から、〈C／大沢〉と

松本との相似性が読み取れることを指摘した。ただ、留保しておきたいのは、「僕」は〈大沢〉の話を、必ずしも脚色して語っているのではないという点にある。かりに〈大沢〉の体験談に対して、一定のリアリティを担保し、語る「僕」を看取するならば、〈C／大沢〉の発言は、当時の心境を反映した信憑性を保つ言説と考え得る。

つまり、松本の自殺に際し、その心中への配慮を欠いた言動をした当時への後悔の思いが、今なお〈大沢〉を苦しめる夢に、形を変えて顕現しているとは考えられないだろうか。

次節ではこの夢と「僕」の〈再話〉する理由について探りながら、〈大沢〉と「僕」との間に生じた関係性を見出していく。

五

以上「沈黙」というテキストで、〈大沢〉およびB、C／大沢」という存在を「僕」がどのように〈再話〉したかを中心に論じてきた。では最後に、〈大沢〉はなぜ、「僕」に体験談を語ったのか、そして「僕」はなぜ、「沈黙」というテキストを〈再話〉したのか、という二点について考究しておきたい。

ここで今一度テキストの冒頭に立ち戻り、「僕」と〈大沢〉の関係性について確認しておこう。「僕」は〈大沢〉の人柄を、主に仕事ぶりについて言及しながら「人が好感を抱かざるをえない人間だった」と簡潔に示している。他方、〈B／大沢〉は、青木に対する嫌悪感を次のように語っていた。

どうしてそんなに嫌いなのか、自分でもよく理解できなかったが、でも一目見たときからその男のことが嫌で嫌でしかたなかった。(中略)そして問題は、大抵の場合、相手の方もおなじような感情をこちらに対して持っているっていうことなんです。(409)

引用の言説を「嫌悪」性を脱臭し、広義の感情について語る部分として捉え返してみると「嫌で嫌でしかたなかった」という感情の発露と、先の「僕」の認識は、同じ位相から発せられている言説とは言えないだろうか。

「相手の方もおなじような感情」を持つものだという論理は、ベクトルの向きを反転させれば次のようにも読み取れる。すなわち「僕」の抱いた「好感」は、〈大沢〉もまた同様に有しており、だからこ

そ、自身のトラウマ的背景とも言える話を「僕」に語ったのではないか。

〈大沢〉は体験談を終えた後、「ときどき本当に怖くなります。夜中にそういう夢を見て飛び起きることもあります。というか、そういうことはしょっちゅうあるんです」と「僕」に訴える。「そうした夢を見たときは、「女房」に「しがみついて」「一時間くらい泣いている」、「怖くて怖くてたまらない」と、私的な領域に及ぶことまでも率直に吐露する。ここから、トラウマ的記憶から解放されない〈大沢〉が看取されると同時に、「僕」に一定の信頼を抱いたからこそ、体験談を語り始め、自分の現状についても言及したと推察されよう。

「僕」と大沢の関係の深化について、さらに一点指摘を加えておこう。それは最後、〈大沢〉と「僕」がビールを飲む場面に認められる。

〈大沢〉と「僕」はその体験談の間、絶えずコーヒーを飲んでいた。しかし終わりに、〈大沢〉は「僕」をおもむろにビールに誘う。

前掲の岡田は、最後の場面で飲むビールについて「たしかにビールが飲みたいような気分」というためらいがちな、含みのある言い方」をする「僕」と「すべてを吐き出した後で沈黙する大沢」との間に

隔たりのあることを指摘していた⁽¹⁰⁾。しかしながら、テキストで表象されるビールには、もう一つ別の意味内容を読み取ることが可能である。

僕が高校時代まともにつきあった相手といえば、ジムで会う人たちだけでした。大部分は年上で、もう仕事を持つている人たちが大半だったんですが、僕は彼らとともに楽しくつきあうことができました。僕らは練習が終わってから何処かでビールを飲んでいろいろ話をしました。彼らはクラスの連中とはまったく違った種類の人たちでしたし、話すことも僕が普段クラスで話しているようなこととはまったく違っていました。でも僕は彼らと一緒にいた方がずっとリラックスできました。

(415~416)(11)

〈C／大沢〉と〈ビール〉を結びつけるのは、ボクシング仲間たちとの深い信頼関係である。〈C／大沢〉は「彼らから本当にいろいろなことを学んだ」と語られるごとく、ここでのやり取りは、「普段」「話しているようなこととはまったく違っ」ており、そこに築かれていたのは「友情」と表現してもよい関係性と言える。

だからこそ〈大沢〉が、個人的な話を終えた後で、
〈ビール〉を所望するというのは、「僕」との間に単
なる「語り手」と「聞き手」以上の関係が生まれた
ことを示唆しているのではないか。二人は体験談を
共有することで、仕事仲間を越えた間柄に深まって
いく過程が、コーヒーから〈ビール〉に飲物が変わ
ることで暗示されていると読める。

本稿では、〈大沢〉の負の記憶として定着する〈体
験談〉を主に松本、青木の順に分析してきた。その
一連の出来事はトラウマ的色彩を帯び、今なお、夢
となって〈大沢〉から離れることがない。こうした
体験談を聞き終えた「僕」は、「沈黙」というテクス
トで〈再話〉することによって、彼に憑りつくトラ
ウマの言語化に成功したのではないだろうか⁽¹²⁾。そ
して共に〈ビール〉を飲むその光景から、「僕」が、
何を目指してこのテクストを語ったかが読み取れる
のである。

【注】

(1) 初出は『村上春樹全作品1979～1989』⑤ 短
編集Ⅱ』講談社、一九九一。

(2) 「羊たちの沈黙―村上春樹『沈黙』論」、宇佐美毅・

千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』所収、おう
ふう、二〇〇八・十一。

(3) 「村上春樹『沈黙』論―深みの共有へ―」、馬場重行・
佐野正俊編『〈教室〉の中の村上春樹』所収、ひつじ
書房、二〇一一・八。

(4) 同様の指摘は、木村功「村上春樹『沈黙』論―学校
と個人をめぐる「小説の現在」―」(日本近代文学関
西支部編『村上春樹と小説の現在』所収、和泉書院、
二〇一一・三)にも見られる。

(5) (3)において馬場は「大沢さん」の思いに正対し
受け止めたからこそ、「僕」はこの話を語っていくこ
とになる」としているが、分析上は、語り手を「大
沢」に求めている。

(6) 「村上春樹『沈黙』に関する一考察―大沢の〈沈黙〉
／「僕」の沈黙―」、「駒沢国文」43、二〇〇六・二。

(7) (1)と同。「沈黙」の本文としては、他に『沈黙(集
団読書テキスト(第二期 B112))』(全国学校図書館協
議会、一九九三)、『レキシントンの幽霊』(文藝春秋、
一九九六)、『レキシントンの幽霊』(文春文庫、一九
九九)、『象の消滅』(新潮社、二〇〇五)『はじめて
の文学 村上春樹』(文藝春秋、二〇〇六)などがある。
なお引用に際しては、頁数のみを記した。

(8) (4)と同。木村は「語り手(大沢にとっては聞き手)

である「僕」の語りの中に、大沢の語りが内包されており、テキストに「僕」の編集の可能性」があることを指摘しているが、ここでの解釈では語り手を三十一歳の「大沢」に設定したため、「僕」の「編集の可能性」を吟味しているとは言えない。

- (9) (2)と同。長谷川は「大沢さん」は、松本の抱え込んでいた苦しみを「今」ではリアルなものとして実感できるに違いない」とし、語り手を三十一歳の「大沢」に設定する。ここでもやはり、語り手の問題を捉え損なっていると言わざるを得ない。

- (10) (6)と同。岡田は「体験談」を語り終えた「大沢」と、「そのまま続きを待っていた」「僕」の間に生じた感情の落差に「僕」の「大沢」に対する「批判意識」を読み取っていた。

- (11) なお、本文内の「ビール」は『はじめての文学 村上春樹』においては「冷たいもの」に変更されている。

- (12) 一方、山根由美恵は「曖昧さ」という方法―村上春樹「レキシントンの幽霊」論―（『国文学攷』214、二〇一二・六）の中で、「沈黙」に「癒されない孤独」が描かれているとし、「自身の「トラウマ」を語った後で大沢さんは「沈黙」の悪夢を見続けることに変わりがなく、語りによる救いはない」と指摘している。

【図1】

〈時間A〉…「空港」での場面(以下同)

〈時間B〉…中学二年(409・10~414・14)

〈時間A〉の挿入(414・15~414・18)

〈時間C〉…高校三年(414・19~424・5)

〈時間A〉

※テキスト全体は「僕」による語りによって構成される。

※括弧内は頁数と行数を示す。